

# 山添村古文書調査だより

奈良大学文学部史学科研究チームと山添村教育委員会による共同調査・研究

2016年9月5日（月）～6日（火）の2日間にわたり、山添村教育委員会と広瀬地区・春日地区のご協力により、4度目の奈良県山辺郡山添村での古文書調査を実施することができました。



今回は春日地区の古文書調査が中心でしたが、今回は春日に加えて広瀬の文書を調査させていただきました。

調査場所は、山添村教育委員会のご協力で今回も波多野公民館を利用させていただきました。

春日地区の資料については、前回の調査で調査を終えることが出来ていなかった春日地区の整理を今回で終えることができました。

春日地区の文書には、近世の寺社が発行していた木板のお札類が残されており、春日地区の信仰について知るうえで貴重な手がかりとなりそうでした。もう1つの文書群は主に襖の裏張りだったもので、表具屋の文書が混入もしているようですが、村の勘定帳の断簡や領主からの出頭命令（差紙）への返答書の写などもあり、近世の村財政や村政について知ることができる貴重な文書群でした。特に、一紙の状態で伝来するだけではなく、思いがけないかたちで古文書が残っていることを知ることができ、目録作成の作業はやや難しかったようですが、調査にあたった学生にみなさんにとって貴重な体験をすることができました。

広瀬地区では、公民館内の西迎寺の所蔵資料と公民館の天井裏に保管されていた区



有文書などを広瀬の公民館から波多野公民館へ一時的にお借りして整理をさせていただきました。

区有文書は天井裏に膨大な史料があるのですが、今回はそのなかから2つの木箱に収められていたものを中心に整理しました。

箱の中には、昭和10年（1935）の目録などとともに、国旗や銭、釘などとともに古文書が納められていました。『やまぞえ双書 1 年中行事』（山添村発行、1993年）によれば、広瀬で新年に行われている修正会の際に次年度の「年預」に目録に基づいて様々な品が引き継がれているとありましたが、その引継される品物と多くが一致していました。恐らく、いまから少なくとも20年前までは、この箱に収められた品々は、年頭に引き継がれて持ち回りで管理されていたものだと思います。

箱の中には、土地の売買関係の文書も一括されていました。これらの文書が宝永2年との墨書のある竹筒に丸めて納められていたのも興味深いものでした。

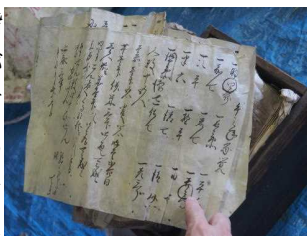


寛文3年（1663）に起きた広瀬と近隣の村との境界争論について訴訟の際に作成されたと思われる「証拠書」の下書きも複数、見つかっています。

こうした17世紀の古文書はあまり残っていないようなので、広瀬地区だけでなく近世初頭の山添村の有り様について知る上でも非常に貴重な文書だといえます。

「午之年当覚」などの表題をもった18世

紀の「当人」の指名に関する文書が複数点まとまって残っていたことも注目されます。「当人」とは、宮座と



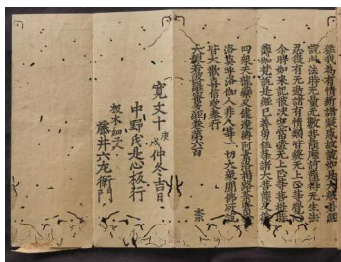
呼ばれる地域の神社の祭祀組織などで神事を行う際に中心となる人のことをいいます。複数の人名が並んでいるなか、墨で何人かに丸をつけているものがありましたので、祭りが終わった後で、次年度の「当人」を決めて引き継ぎをする際に作成したものと思われる。こうした史料が同じ様式で複数年にわたって作成されていたことがわかります。

広瀬では、現在も地元にある熊野神社のお祭りの際に次年度の大当屋を決定し、当屋と組のメンバーを記したものを2通作成し、1枚はよく見えるところに掲示しているそうです（『やまぞえ双書1 年中行事』）。こうした現在行われている民俗と残された古文書との関係なども含め、村落組織や信仰の歴史的な変遷を解明することができる可能性をもつ興味深い文書であると思われる。

これ以外にも天井裏に数多くの文書が残されています。今後とも引き続き調査を進めていけば、もっと新しい発見があるのではないかと期待されます。

また、西迎寺で江戸時代に摺られた木版の大般若経が見つかりました。12の木箱に収められていました。箱には嘉永6年（1853）の裏書きを持つものもありました。

奈良県の大般若経については、『奈良県所在近世の板本大般若経調査報告書』（奈良県教育委員会、2005年）という大部な報告がありますが、広瀬は調査対象に入っておらず、これまで知られていなかったもののように



600巻の奥書には、「寛文十

庚戌仲秋吉日／中野氏是心板行」などの刊記がありました。中野是心は京都四条寺町の仏書を中心に扱っていた書肆の一



族であろうといわれています。中野是心による版木は安永5年（1776）に他所に譲渡され若山屋からの発行となっていきます。詳細は今後の詳細な調査を待たないといけませんが、こうした事情から、遅くとも18世紀半ばまでに摺られた大般若経ではないかと考えられます。

巻末に寄進者の名前や戒名を記すものがありました。多くは現在の山添村・名張市内といった近隣の人びとでした。

いずれにしても、いつどのように伝来したかや、どのような場面で大般若経が転読されていたのか、山添村内に存在する他の大般若経との関連など、詳細の解明はいずれも今後の課題です。

西迎寺に大切に保管されていたもののようで、長年の間にたまった埃などを払って現状を確認するにとどまりました。詳細な調査はすべて今後持ち越されることになりました。

今回は、5史料1点ごとに1枚のカードを作成し、581点をカード化することができました。これまでと合わせると今回の調査で約3300点近い史料の整理ができたことになりました。現在、カードをもとに目録作成の作業をすすめているところです。



今回の調査では未整理に終わったものも多くありましたので、今後も山添村での調査は継続していく予定です。

#### 【奈良大学文学部史学科研究チーム】

河内将芳、木下光生、大田壮一郎、森川正則、村上紀夫、ほか大学院生3名、学生15名